

虐げられた女性たち

—— *Winesburg, Ohio* の世界 ——

伊藤 太郎

The Oppressed Women in Winesburg, Ohio

Taro ITO

はじめに

シャーウッド・アンダソン (Sherwood Anderson, 1876-1941) は、彼の出世作の『オハイオ州ワインズバーグ』(*Winesburg, Ohio*, 1919)¹⁾の中で、19世紀末から今世紀初頭にかけてのアメリカ中西部の地滑り的な社会構造の変化と、その激変する時代状況の中で翻弄され深刻な自信喪失や「内」と「外」の分裂状況に陥った人々の内面世界を見事に描き出した。故郷の中西部の農村社会への深い理解と愛情に裏付けられたこの作品は、社会状況の変化に的確な分析を加えて、現代社会が直面する人間疎外の問題、孤独、神経症的不安、狂気といった現代人の「心」の問題を提起して、彼の最高傑作ともなった。

アンダソンがマーク・トウェインからの伝統を引き継ぐ簡潔で美しい文体で、この連作短編集の中で描こうとしたものは、産業化社会到来の中で、生産の本流からも、消費の本流からも外れたアウトサイダーとなって、いわば社会から逸脱した地下世界の住人となった孤独な群像のグロテスクな姿だった。新しい時代の到来は、当然の事ながら、多数の不適合者たち、脱落者たちを生んだ。新旧の文化の狭間にあって、立ち竦む者、消化不良の下痢症状を呈する者、自信喪失の抑鬱状態に落ちる者、アイデンティティの危機に喘ぐ者、個我の中に緊急避難する者など、様々だった。

とりわけその中でも、印象的な存在感を発揮しているのは、時代の激流の中で喘ぎ、悲痛の声なき声を上げる女性の登場人物たちだった。当時まだ社会的発言権も持たず、忍従の生活を強いられていた、か弱い女性たちこそが、文化衝撃の深手をまともに受ける被害者だった。アンダソンは、いまだ家長制厳しき父権社会、因襲的な農村部の閉鎖社会、人間性喪失をもたらす産業化社会といった諸相の中で、ただ抑圧と葛藤の悲運人生に耐えるしかない、表現する声すら持たない彼女たちの内面世界に焦点を当てて、彼女たちが内包し体現する不安や狂気に表現を与えた。

本稿は、『オハイオ州ワインズバーグ』に登場している4人の主要な女性たちを俎上に載せて、彼女たちの人物描写、性格付けや価値観、女性としての生き方などを詳細に分析・考察する。²⁾特に、心理的な軌跡を辿ることを主眼にして、当時の彼女たちが置かれていた社会や時代の差別的で抑圧的な状況を浮き彫りにしたいと思う。古い時代の社会規範や価値観には大いに挫折感を味わい、また新しい時代精神には齟齬を来してしまい、ついには窮地に落ちてグロテスクな姿を曝け出さざるを得なかった、その経緯を辿りたい。なお、扱う作品と登場人物の順番は

次の通り。

- I. 『教師』 'Teacher' の主人公、ケイト・スウィフト (Kate Swift)
- II. 『冒険』 'Adventure' の主人公、アリス・ハインドマン (Alice Hindman)
- III. 『母親』 'Mother'、及び『死』 'Death' の主人公、エリザベス・ウィラード (Elizabeth Willard)
- IV. 『信仰』 'Godliness' の主人公の一人、ベントリー農場のルイズ (Louise)、後のジョン・ハーディ夫人 (Mrs. John Hardy)

I

『教師』'Teacher' の主人公、ケイト・スウィフト (Kate Swift) は、以前、ジョージ・ウィラード (George Willard) 青年を教えたこともある、30才の独身の小学校教師。町の人々には、仕事熱心な余りに婚期を逃した、「結婚をしようとしないう女」(a confirmed old maid)と思われていた。血色の悪い、しみが一杯の顔だったので、不健康の印象を拭えなかった。実際、このまま寒い夜の外出を続けると、耳が聞こえなくなる恐れがあるという医者診断だった。外面的な容色は衰えつつあり、とても美人とは言いがたかったが、寒空の夜の街を背筋をまっすぐに伸ばし、肩を張って一人歩く自己陶酔的な姿は、周囲など眼中にないという内的緊張感を漂わせて、「小さな女神」(a tiny goddess)のような気高さを漂わせた。

幸か不幸か、今まではほとんどケイトには恋愛経験がなかった。ニューヨークにも2年間住み、欧州旅行の経験もあり、覗き見するカーティス・ハートマン師 (the Reverend Curtis Hartman) が彼女の隠れた喫煙に都会的退廃を感じはしたけれども、彼女が時代を先取って自由恋愛を実践したフラッパーだった訳ではない。逆に彼女は、禁欲的な倫理観が強い、恋愛行為には縁のない、自制的な女性だったらしい。知的職業に就く女性には、仕事優先で、恋愛・結婚は必須の選択ではないのは今も昔も変わらないのだが、今まで彼女に恋愛感情を抱かせてくれるような男性がいなかったのも事実だった。少なくとも、このワインズバーグに住むようになってからは、彼女を魅了するような、知的で誠実な男性は登場しなかった。有為の若者がみんな都会に出て行ってしまって、町にくすぶっているのは、うだつが上がらない落伍者や偏屈者、変人ばかりという状況を差し引いても、年下の教え子に無意識の恋愛感情を抱き、性的な誘惑をかける結果になったのは、やはり彼女の性的な未熟さを露呈していたのか。

町の連中は、ケイトが長年教師を続けて精神的にも経済的にも自立していたので、自己充足をした、勝気で男勝りの、他人欲求の少ない女だとの評価を下していた。「口が悪くて気まま」(she spoke sharply and went her own way)だったので、女性的な潤いや人間的感情の欠落した、いわば欠陥人間の烙印を押されていた。そもそもが、非社交的で孤独癖があり、「人を寄せ付けなような辛辣な」(biting and forbidding) 性格だった。教室でも口数が少なく、冷やかで、厳しかった。真面目なのだが対人関係が苦手な人が、教室では一国一城の主でいられる教師には案外多いのだが、愛想も愛嬌もあまりない、取り付く隙がないケイトが、子供相手の小学校教師を天職として選んだのは、当時他に女性の知的職業がなかったことを前提としても、妥当な選択だった。しかし、厳しいだけの、冷血で無愛想な女性だった訳では決してない。教師向きの真面目さ、真摯な人生態度に加えて、何よりも欠くべからざる資質の、教育への情熱と使命感を持っていた。

その証拠に、生徒たちとは、意外なほどの親愛と信頼の関係を築いていた。子供たちの心が離れなかったのは、本質的にケイトが子供好きの教育者だからである。例えば、時折何かが起

こって、彼女が幸せそうな表情を浮かべると、生徒たちも幸せな気分になった。彼女は授業中、熱を帯びてくると非常に早口で喋ったのだが、その時頭に浮かんで来たことを何でも、靈感を帯びたように話して、子どもたちを腹を抱えてげらげら笑わせた。彼女も一緒になって笑った。楽しい挿話を勝手にアドリブで作り上げ、自分で見てきたように彷彿と話す巧みな話術で、子どもの心を惹き付けるコツを心得ていた。ひとしきりみんなで笑って、また急に、彼女は冷やかな厳しい先生に戻った。躁鬱病的な気分変動ではなかった。

ケイトには相反する二面性があった。理性が司る、〈建て前〉的な自我表層部分は、教師としての本分に則り、きれい事を並び立てがちなペルソナとしての社会的自我だった。その内側の隠れた部分に、昼間は抑圧され夜には息づいてくる、情欲や本能衝動が支配する〈本音〉的な内的自我の領域が潜んでいた。夜、ペルソナの仮面を脱ぎ、くつろいでベッドに寝そべり、煙草をふかしながら、裸に近い姿で本を読むのが彼女の習慣だったが、その時の姿は、明らかに、無防備な、無心で美しい、柔らかい内的自我そのものだった。彼女ほど「激しい情熱的な魂の持ち主」(the most eagerly passionate soul)はいなかったので、普段は、見事にその内的自我は、ペルソナの頑丈な仮面の下に収まっていた。しかし、今、ケイトの生活に一つの危機が訪れていた。表面は冷静で理知的に見えても、内面は葛藤波乱の状態だった。一度ならず家を飛び出して夜の街を徘徊したのは、荒れ狂う情欲を鎮めるための無意識の行為だった。歩いているうちに、戸外へ飛び出さずにいられなかった向こう見ずな興奮した気分が消えた。

Although no one in Winesburg would have suspected it, her life had been very adventurous Day by day as she worked in the schoolroom or walked in the streets, grief, hope, and desire fought within her. Behind a cold exterior the most extraordinary events transpired in her mind.³⁾

実は、ケイトはかつての教え子のジョージ青年に叶わぬ恋心を抱いて、噴出する性愛感情に苦しんでいたのだ。彼女の悲劇は、自分の中の情欲に疼く内的自我の存在に充分に気付いていないことだった。ジョージ青年の作家としての才能を認めて、それを伸ばしてやりたいという、教師としてのもっともな言い訳で彼に近づいたのだが、人生の扉を開けてやりたいという情熱が強すぎて、それが肉体的な情欲に変わってしまった。孤独な女教師の能面のようなペルソナがいつしか亀裂して、その隙間から、抑えきれない愛欲の情炎が吹き出した。若い男性の性的魅力の虜になってしまったケイトには、彼が男性の役割を立派に果たせる一人前の男性のように見えて、「男性に愛されたいという激しい欲望」(the passionate desire to be loved by a man)に捕らわれてしまった。

しかし結局は、最後の場面で、教師としての理性が激情の嵐に打ち勝つことになった。いや、ケイトの男性体験なしの性的未熟性が、一線を越えて性的関係を持つことを恐怖したのかも知れない。ともかく、嵐の夜、訪れてきたケイトの容貌の際だった美しさに初めて気付いたジョージ青年だったが、戸惑いながらも、衝動に身を任せて身体を寄せてくるケイトを抱きしめようとしたその時、急に彼女は身体を強張らせて、拳で彼の顔を殴って、逃げ出してしまったのだ。この瞬間に、破廉恥にも、教え子を誘惑しようとしている自分の醜態ぶりをまざまざと認識したようだ。本心を偽って、情欲にうごめく内的自我の内実に気付かない振りをしながら、人生の意義を教えると言葉巧みに誘っていた自分自身の恥ずべき姿を、ケイトは我が目で見たのだ。ジョージにわざと荒々しい横柄な態度を取ったのも、実は自分に向けるべき激しい怒り

の成せる業だったし、成熟した年上の女性に肉欲を駆り立てられてその気になったジョージの目に自身の情欲の炎が映っているのを見たからだだった。

大切なことは、ジョージ青年に近づこうとしたケイトには、性欲の本能衝動だけでなく、社会的自我の堅固な甲冑を脱ぎ、胸襟を開いて、人間同士の心と心の温かい触れ合い（生命交歓）をしたいと願う、男性が忘れていたようなエロス衝動があったということだ。如何にも女性的な、人間本来の親愛欲求が根底にあった。これこそ作者アンダソンの主張の眼目だった。教師としての純粋な情熱と、一人前の男に抱かれないという性欲衝動と、さらにもう一つ〈ヤマアラシのジレンマ〉などものともしないエロスの親愛欲求が、未分化のまま彼女を襲い苦しめたこと、これがケイトの滑稽で哀しい、一人芝居のドタバタ劇の実態だった。

ケイトは町の人々から好奇の目で見られてはいたが、田舎町の因襲性から直接被害を受けた訳ではない。彼女自身が他人の目を気にしない孤独志向の分裂気質者だったために、案外思い通りの人生を、しっかりと、他からは自立した様子で送っている。しかも希望通りの知的職業に就いて社会との繋がりも保っていたから、当時の女性としてはむしろ幸せな、羨ましがられる生活だったろう。彼女の悲劇は、外的世界から疎外され歪みを被ったと言うよりも、真面目過ぎるほどに真摯に人生を歩もうとする女性が、中年に向かう焦燥感のために、自分でも気付かないうちに性欲衝動の虜になってしまうという悲しさ、哀れさである。時代を超えてあるグロテスクな人間存在の持つ宿命でもある。それが人間本来の自然な親愛欲求の発露であるのに、誰も（ケイト自身も含めて）理解をして受け止めようともしない時代であり、社会であった。温かい触れ合いを求める親愛欲求は女性的な弱さの表れとして排斥され、もはや彼女は孤絶の淵に落ちるしかない、時はまさに疎遠欲求に捕らわれた孤独な群衆のうごめく時代である、ということまでアンダソンが踏み込んで述べているなら、事態はかなり深刻だったと言わざるを得ない。⁴⁾

Ⅱ

『冒険』‘Adventure’の主人公アリス・ハインドマン(Alice Hindman)は、ウィラードがほんの子供だった頃に、もう27才だった。ワインズバーグの町を一度も離れたことがない、衣料品店勤めの女店員だった。背が高く、痩せ型、猫背気味で、身体の割に頭が大きい、敢えて言えば、身体的な成熟が不十分な、性的魅力に乏しい女性だった。もって生まれた内気で控え目な、慎重すぎる性格で、非常にもの静かだが、純真な心が絶えず立ち騒ぐ、そんな情熱をじっと内に秘めたタイプだった。

16才のアリスは、当時ワインズバーグ・イーグル新聞社に勤めていた年上の青年ネッド・カリー(Ned Currie)と熱烈な恋愛をした。都会の新聞社にもっと条件の良い勤め口を見つけるために町を出る彼に、情熱のおもむくままに身を任せ、惜別の悲しみから一夜の契りを持った。一日千秋の思いでネッドが迎えに来てくれるのを待つアリスだったが、彼はシカゴで新しい恋人を見つけてやがて彼女のことを忘れてしまった。22才の時、退役軍人だった父親が死亡。寡婦年金で織り機を買った母親は、絨毯織りの内職を始め、アリスは店員として勤めに出た。決まりきった仕事のおかげで、待つ時間の長さや、索莫とした不安な気持ちを忘れることができた。金を貯めて、自分も恋人の後を追ってシカゴへ行くことを心の支えにしていた。

肉体的な関係を持ったことを、ネッドの責任にするつもりはなかった。自分の行動には自分で責任を取ろうとする、人を責めるよりは自分を責める、自罰傾向の強い、健気な女性だった。だから純潔を捧げたネッドとしか結婚はできない、わが身を他の男に与えるのは道に外れたこ

とだと思った。「私はあの人の妻なのだし、あの人が帰ってきてくれようと、くれなかりと、あの人の妻として暮らしていこう」(I am his wife and shall remain his wife whether he comes back or not.)と自分に言い聞かせた。自分には待つ人がいるという幻想だけが彼女の自己愛を満足させ、精神安定の手段となった。純潔志向の、伝統的で古風な結婚観に縛られていたからこそ、貞節な妻を演じるように自己説得し、自分自身を悲劇のヒロインに仕立て上げないと、自分は騙され捨てられたという受け入れ難い現実のパニックになること必定だったのかも知れない。社会的な体裁や世間体を気にし、面目を重んじる外的自我の要請で本当の自己(内的自我)をも偽ることになった。

朝8時から夕方6時までの長い勤務だったが、さらに1週間のうち3日間は、夕食後店に引き返して7時から9時まで店番をするようになった。ネッドがもう帰って来ないことの不安に怯えながらも、孤独感を紛らす工夫をして、夜寝る前のお祈りの際に、目の前にネッドがいるように声を出して語り掛けたり、部屋の家具に異常な対象代理の愛着を感じたりした。シカゴ行きを諦めた後も、利子だけでネッドと二人で生活ができるまでお金を増やそうと、新しいドレスも買わずに貯金を続けていたが、いつも一人になると貯金通帳を広げて叶わぬ夢を思い描いていた。少し異常な執着傾向を見せるようになった。

無為に歳月を重ねる孤独の生活に耐えきれなくなって、近郊の林に、気晴らしの散歩に出かけるようになったのもこの頃だった。牧歌的な田園風景の中、萌え出る春の新緑が自然の生命力を感じさせはしたが、もはや抑鬱気分浸って生命感情の失せたアリスの慰めになることはなかった。逆に、着実に巡り移る季節の変化に、虚しく年ばかりとっていく自分の姿を重ね合わせて、恐怖の戦慄と焦燥感を覚えてしまった。若さで勝負するしかない、他にこれといった長所も美点もない、無知を自覚する田舎娘には、青春が過ぎ去って、もう幸せを見い出すすべを永遠に失ってしまった無力感は耐え難いものだった。悲しみや抗議の気持ちと共に、しかし、「自分を偽っても仕方がないではないか」(“Why do I tell myself lies?”)という気持ちが湧いてきた。ネッドを諦める決心がついて、「ほっとする奇妙な感じ」(an odd sense of relief)がした。現実受容の安堵感だった。

25才の時、母親が再婚して、ますますアリスは孤立感や見捨てられ感を募らせた。教会に加わり、人と交わり、会合にも出るようになったのは、「人生への新たな足場を築く」(get a new hold upon life)ためだった。ウィル・ハリーという中年男(薬屋の店員)と付き合い始め、夜道をデートした時、手を伸ばして彼の身体に触ったり、ベランダの暗闇に一緒に座ろうと自ら誘いたい衝動に駆られたが、誤解を恐れて思いとどまった。27才の時、「どうしようもない落ち着きのなさ」(a passionate restlessness)に襲われ、ウィルとの付き合いが屈辱的に思えて耐え切れなくなった。ベッドに入っても眠られず、まじろぎもせず暗闇を見つめた。「人生から何か明確な答え」(some definite answer from life)を要求しないではいられなかった。当然の事ながら、夜になると、封印していたはずの親愛欲求や性欲衝動が頭をもたげてアリスを苦しめた。毛布を丸め、人が寝ているようにシーツをかけて、ベッドの脇に膝まづき、繰り返し繰り返し言葉をささやきかけながら、それを愛撫した。「なぜ私には何も起こらないのだろう。なぜ私はここに一人残されているのだろう」(“Why doesn't something happen? Why am I left here alone?”)と、虚しく呟いた。誰か他の特定の男性を欲している訳ではなかった。

人に愛されたいという欲求が我慢の限界を越えた。ある晩、服を脱いで、窓ガラスを打つ雨の音を聞いているうちに奇妙な衝動に駆られ、気が付くと裸で外へ飛び出していた。冷たい雨に打たれながら、そのまま街を駆け抜きたい冒険衝動を覚えた。

She thought that the rain would have some creative and wonderful effect on her body. Not for years had she felt so full of youth and courage⁵⁾

雨が彼女の情欲に火照る身体を清めたと言うよりも、雨に身体を浸すことで皮膚感覚が活性化し、生き生きとした生命感情が蘇ったようだ。自罰的で、自己抑制傾向にあった外的自我の衣を脱ぎ捨て、自我解放気分を一気に噴出した。自信と勇気を取り戻し、浮かれ騒ぎたくなる精神高揚した躁状態の中で、誰か他の孤独な人を見つけて、抱擁したくなった。束の間の浮遊感覚を満喫しながら、狂おしい、捨て鉢な気持ちで、歩道を歩く男に近づき声をかけた。

しかし、その男は老人だったことで、我に帰り愕然とした。誰でも良いと、盲目的に、見境もなく破廉恥な行為におよび、自分が肉欲の虜になっていたことに羞恥心が募った。恐怖の余り立ち上がることもできずに、震えながら手と膝で這って家に帰った。我を忘れて、取り返しのつかない事をしてしまった、という後悔。「一体、私はどうしてしまったのだろう。用心しないと、何か恐ろしいことをしてしまいそうだ」(What is the matter with me? I will do something dreadful if I am not careful.)という自己不安。躁に浮かれて無謀に噴出させた親愛欲求だったが、到底他人には理解してもらえぬものだった。孤独に耐えて「一人で生き、一人で死ななければならない運命」(the fact that many people must live and die alone)に勇気を持って直面しようと、自分に言い聞かせるのだった。

アリスは、たくさんの物事に対処することの不得手な、柔軟性の乏しい、しかし強い忍耐力を持った、愚直で心優しい女性だった。日常生活に楽しみ事の少ない時代だったので、快楽衝動を封印したまま、本当に小さな幸せを心の支えに女たちは苦難の生活を堪え忍んだのだが、彼女もそういう時代の女性だった。アリスの悲劇は、あまりにも自己犠牲的で伝統的な性同一性を、堅牢な外的自我の衣にして纏ってしまったことだ。安定志向が強く、受身的で、依存的な性格が、いつの間にか内的自我を窒息状態に陥らせていた。がしかし、男性に全面的に追従し、性的快楽を供給することで、引き換えに経済的、精神的保護を期待するような女性であった訳では決してない。逆に、愚かしいほどに慎ましく、自分の分を弁えてもいた。一度だけ身体を与えた相手に、いつまでも変わらぬ忠誠も捧げ、いつかは自分の処に帰って来ることを信じて、献身的に待ち続ける。忍従するばかりで、要求の声を挙げない。責任転嫁をせずに、自分で責任を取る。愚かしい程に古風な女性だった、と言わずして何と云えば良いのか。

しかし、アンダソンはアリスの純粹に過ぎる愚直さを揶揄してはいない。既述した『教師』のケイト・スウィフトの場合と同様、時代の変化の狭間で、時代の主流からドロップ・アウトするしかない孤独な女性の悲哀の人生、不運な運命こそが、その主題であった。アリスは、確かに「女性も己をしっかりと持して、人生での自分自身の目的のために、与え、取らねばいけないという現代的なものの考え方」(the growing modern idea of a woman's owning herself and giving and taking for her own ends in life)を理解できなかった。女性も次第に、精神的に自立し、経済的にも独立した生活を送ることが要請されていた。アリスは経済的には確かに自活していた様だが、純潔志向のレベルに留まったままで、新しい女権意識や現実認識などにはまるで無縁だった。だが彼女には、その欠点を補って余り有るほどの人間としての美点と魅力が認められた。人間的誠実さ、責任感、倫理性、忍耐強さ、意志持続力、人生への真摯さ、孤独の受容性など、いずれもネッドに欠けているものばかりだった。

アリスに比べると、彼女を捨てたネッドが何と云う加減な人間かが浮き彫りにされる。ネッドの描写を通して作者の時代風刺の視点が透けて見える。彼は世の男たちと同じく、嘘つき、

軽薄、自分勝手のそしりを免れない卑劣漢だった。倫理的な自己規制ができない、つまり、本質的な倫理観が乏しかった。寂しさに駆られて、手っとり早く側にいる女性と情を通わず、そんな意志薄弱の男性で、女性をしっかりと受け止めてやるだけの度量も根性もない。むしろ、苦境に落ちると母性的愛情に救いと慰めを求めてしまう、どちらかと言えば女性に甘える方が得意という、未熟タイプの男性だった。寂しいと我慢ができずに毎晩のように手紙を書き、新しい恋人ができるとアリスのことはすぐ忘れる、一方的に自分の都合で女性を捨てる、そんな薄情さ、無責任さだった。情に脆い優男タイプなので、一見優しく見え、女性にもてるが、確固とした男らしい意志力や忍耐力を欠く。それなりの目先の利口さや行動力はあるらしいが、彼が初志貫徹して希望通り、都会での新聞社勤めができたかどうかは大いに疑問だった。その都度、都合のいい言葉を吐くが、その言葉は信用できないという致命的な欠陥を持った、いわば当時主流を占めた男たちの一人だった。時代のキーワードは、まさに彼の人間性に象徴されるところの、軽薄、無責任、自分勝手、未熟、世俗的、非倫理的、狭量、意志薄弱だった。

III

この連作短編集には、出産や過労で体調を崩して若くして死んでしまう女性の何と多いことか。『紙屑王』‘Paper Pills’で、リーフィ医師に看守られながら結婚して1年と経たず死んでしまったブルーネットの女性も若くしての病死だったし、子供が生まれてすぐ母親が死ぬ逸話もさりげなく挿入されている。幼くして母親を失ったことが娘の精神的成長に何らかの歪みを与え、結婚後の生活まで左右する大きな傷跡を残す悲劇の話である。次に述べる『母親』‘Mother’、及び『死』‘Death’の主人公エリザベス・ウィラード(Erizabeth Willard)も幼くして母を亡くし、IVで論じる『信仰』‘Godliness’のベントリー農場のルイーズ(Louise)、後のジョン・ハーディ夫人(Mrs. John Hardy)の母親も、産後の肥立ちが悪く他界した。

ジョージ・ウィラード青年の母親であるエリザベスは、5才の時に母親を亡くしていたので、母親の温かさや母親に可愛がられた記憶がない。父親は、娘の成長が気懸かりだったが、自分のことだけで手一杯、ホテル経営に神経をすり減らしていた気弱な人物で、精神的庇護者になり得なかった。エリザベスは旅商人たちの出入りする殺伐とした雰囲気の中で育ち、「少女時代は想像しうる限りの最もでたらめな放任の生活ぶりだった。」(Her girlhood had been lived in the most haphazard manner imaginable.) 若い娘時代は、活動性、積極性といった男性的要素を発揮して、「人生の真の冒険者」(a real adventurer in life)たらんと、人目も憚らず、向こう見ずに奔放に振舞った。舞台熱に憑かれ、けばけばしい服装で旅商人と連れだって、これ見よがしに街をのし歩いたり、男装をして自転車で大通りを乗り回したりして人々を驚かせた。世界中に放浪の旅をして、新しい人との出会いを楽しみたいという夢もあった。

町の保守的な道德観をものともせず自由恋愛を実践して、18才で処女を失った。近づく男たちはエリザベスを理解し、共鳴してくれるように思えた。彼女は男との性的融合感の中で、自分でも分からない衝動が癒される様な気がした。接吻に始まり、奇妙な狂おしいほどの感情の高まりの後で、暫しの陶醉感と安らぎを得て自我解放感を満喫はしたが、しかし、結局いつもすすり泣きの後悔に終わるというパターンだった。思いやりのある優しさを見せていた男たちが、彼女の軀を欲望のままにむさぼって満足するだけの、我が儘な小さな子どもになったような気がした。

エリザベスが求めたものは、単に情欲だけに駆られた性的交わりではなく、もっと深いレベルの心と心の交流、親愛欲求に基づく生命交歓だった。彼女は「いつも暗黒の中に手を差し入

れて、別の誰かの手を握りしめよう」(putting out her hand into the darkness and trying to get hold of some other hand)とする衝動的な強迫行為を繰り返しながら、次から次へと男性を渡り歩いた。「真の恋人」(a real lover)を求めていわば自己実現を目指しての、自己の中のアニムス(animus)との合体衝動の意味もあった。幼少期の深刻な愛情飢餓が心の深部に焦燥感や虚無感を植え付け、それが根源的な存在不安となって彼女を駆り立てていったらしい。

憑かれたような男性遍歴は、無論、エリザベスの心の絶対的空白を満たしてはくれるはずがなかった。男たちは彼女の望むものを与えてはくれなかった。次第にこんなはずではないという戸惑い、期待はずれ感が膨らんだ。恋愛体験は無意味に終わった。自由を標榜し、放浪の夢を抱き、変身願望に焦がれた彼女の青春にピリオッドが打たれた。町に流れていた悪い噂、尻軽の淫乱娘というレッテル貼りは致命的だった。失意に打ちのめされて、誰でも良い、相手の男の気が変わらぬうちに結婚をしようとエリザベスは焦った。父親の忠告を無視して、世俗的な結婚が、終わりのないこの模索の旅に決着を付けてくれるかも知れないという淡い期待を持ったのだ。手近にいたホテルの番頭のトム・ウィラードと結婚をした。

危倶が現実となった。最初の晩に、夫の軽薄極まりない偽善者の正体を見抜いた。つまり、ウィラードは、人生の伴侶としての妻の意志や感情を尊重し、その全体像を愛してくれる、対等の関係を許容する男ではなかった。番頭が、ホテル経営者の娘と結婚して、自分の手腕で経営に携わりたいという思いを秘めた、たぶん、妻の財産目当ての結婚だった。エリザベスに男を見る目がなかった未熟さ故の、重大な選択の誤りだった。結婚が間違いだったことをすぐに気付いて後悔したが、後の祭りだった。ホテルの経営が結局破綻したことが、二人の心の離反をさらに大きくし、憎しみと軽蔑を増幅させることとなった。

夫のトム・ウィラードはホテル経営も失敗し、今までなにつうまくいったためしかなかったのに、自分を成功者と偽り、町の有力者の一人だと自認する自惚れ屋だった。町の政治に情熱を傾けていて、古くからの民主党の草分け的党员であるのは事実だったが、心の底では、大いに女を蔑視・差別していて、男が世の中を動かして支配していると信じて疑わない古い体質の男だった。成功・出世・金儲けといった産業社会を支える時代精神を担った、中身よりも社会的な体面や体裁だけを重んじる、心貧しき人物の典型だった。

トムは自分の実体を見抜いている妻を、内心は恐れていた。妻への負い目で余計に妻を憎み、空威張りの虚勢を張った。エリザベスに言わせると、トムはカーゼル髭に軍人式のきびきびした歩き方をして男らしさを演出はしているが、その実像は、急かれたように無意味な言葉を吐く、中身のない、形式主義的な、俗物根性の塊の存在だった。利害にめざとく打算的な人間であるという意味では時流に乗っていたが、時代の流れに翻弄される余り、成功に目が眩んで自分を見失っている、人間的な良心や魅力に乏しい存在だった。彼も、既述のネッドと同類の男だった。

しかし、結婚後の夫婦間の力関係は、トムの人間性に失望し結婚を後悔したエリザベスに追い討ちをかけるように、決定的に夫有利、妻不利の状況だった。彼女が幽霊のようにホテルの薄暗い廊下を歩く姿が、夫との主導権争いに敗れ、社会との有意義な結び付きが持てずに、結局家に縛られたまま朽ち果てるしかない運命を象徴していた。時代は、まさに女性が本来の創造的役割を果たし得ない絶対的男性優位社会。合理性、効率性といった男性的原理が支配的な産業化社会は、女性的なものが価値を認められない、女性的なナイーブな心情や母性的な情愛が無惨に踏みにじられるしかない社会でもあった。有能で意欲的な女性も、悲惨な結婚をしたが最後、家庭の外に自由に出入れず、無力感や無価値感に鬱々と苦しまねばならなかった。エ

リザベスの場合、さらに因襲的で閉鎖的な農村社会の保守性が彼女の窒息状態をさらに悪化させた。娘時代にあんなに奔放に、積極果敢に人生に挑んだエリザベスも、結婚を境に、陽から暗へと、希望から絶望の生活へと落ちる運命だった。息詰まる閉塞状況から逃れるために、嵐になりそうな日に、彼女は一人で馬を走らせ、遠出をしたことがあった。馬に激しく鞭を当て、全力でどこまでも走らせ続けた。明らかに、現実拒否の意味合いを持った、自暴自棄的な逃避行であり、一種の自殺企図だった。

I wanted to go at a terrible speed, to drive on and on forever. I wanted to get out of town, out of my clothes, out of my marriage, out of my body, out of everything. I almost killed the horse, making him run, and when he could not run any more I got out of the buggy and ran afoot into the darkness until I fell and hurt my side.⁶⁾

自分の人生に見切りをつけ、いつしか病床に臥せるようになっていたエリザベスだったが、息子のジョージには深い共感と心理的絆を感じて、自分の果たせぬ夢を託していた。ジョージの前だと、内気でしとやかな、控え目な娘のような態度を取り、初恋の相手のように素直になった。夫を見限って、息子を夫代わりの心の支えにしていた嫌いは無きにしも非ずだが、しかし、息子を取り込み、その精神的自立を疎外する悪しき母親ではなかった。逆に、ジョージには嫌悪と怨念と絶望の病巣となっている家を出て、かつての自分のように自由の空へと飛び立ち、思い通りの人生を大いに楽しんでもらいたかった。だから、夫のトムが息子のジョージを自分と同類の、金儲け主義、成功至上主義の憎しむべき俗物になるようにたらし込もうとしているのを知って、狂気のようにいきり立ち、夫に殺意まで抱いた。結婚後、敗北して、自分が無意味な下らない人間だという自己否認に苦しみ、黙々と無駄に近い思索を重ねてきたが、「今こそ行動の時」(“Now, I will act.”)という決意を固めた。病身から余力を振り絞って、みずから「悪の声」(the voice of evil)となった夫の忌まわしい誘惑から息子を救おうという決意だった。

息子のジョージと共に、エリザベスを慰め、心の支えとなっていた人物がもう一人いた。別の短編、『紙屑玉』‘Paper Pills’にも主人公として登場している変わり者のリーフィ医師(Dr. Reefy)だった。彼女が死ぬ数年前に、リーフィ医師のもとに診察に行ったのがきっかけで、以後、受診だけでなく喋るだけのためにも時折訪れては、お互いの生涯のこと、頭に浮かんだ想念などを話した。実はこの変わり者のリーフィ医師は、ワインズバーグの町の男たちの中で唯一、物質社会の忌まわしき毒牙に冒されていない、人間らしい情愛や心の余裕を失っていない、外見よりも中身を大切に、まともな人種だった。彼はトム・ウィラードとは違って真実の言葉を語った。彼と1、2時間、気楽にものを喋った後は、エリザベスは気持ちが清新になり、娘時代の若々しい生気が戻って来て、死を待つだけの単調な日々には耐えるだけの力が得られたような気がした。彼と喋るという行為は、心と心の触れ合いを可能にし、心理療法的な精神浄化や自我解放の効果をもたらしてくれた。彼だけが〈女性であること〉の悲しみ、哀れさを受け取められる貴き理解者だった。

リーフィ医師は、挫折と絶望の男性遍歴や結婚生活の末にエリザベスが見いだした、たった一人の友人だった。二人とも互いの中に求めていたものを見つけて恋愛感情を抱き始めたが、求愛したのはリーフィ医師の方だった。彼は感極まって彼女を抱擁し、接吻の嵐を与えたが、やつれ果てた女の身体の莢から抜けでた、愛らしい無邪気な少女を抱擁しているようだった。

その求愛の場面は階段を登って来る足音で中断され、彼女は我に返って身を翻して帰って行った。膝はがくがく、身を震わせ、今にも倒れそうな状態だったが、彼女が人生で二度しか経験しなかった「解放」(release)の貴重な瞬間だった。死期の近いことを知っていたエリザベスは、リーフィ医師の求愛を誇りとしながらも、節制を弁えて彼の愛人となることを自身に禁じて、二度とリーフィ医師の前に姿を現すことがなかった。自ら身を引いて辞する潔癖さと倫理感を持ち合わせていた彼女は、死を待ち望み、従容として死を迎えた。生がある意味で幽閉であり、束縛であったエリザベスにとって、死は脱出であり、解放であり、救済であったのだろう。

IV

『信仰』'Godliness' 4部作のうちのⅠ部からⅢ部までに登場しているルーイズ・ベントリー(Louise Bentry)、後のジョン・ハーディ夫人(Mrs. John Hardy)は、父親のジェシイ(Jesse)が跡取り息子を授けて欲しいと神に祈った時に生まれてきた、つまり望まれずしてこの世に生を受けた、不幸な星を背負った娘だった。もともと虚弱だったが過労が祟って母親のキャサリン(Catherine)は彼女を出産後まもなく死亡。女の子が生まれたことを喜ばなかった、衝動的で、冷酷で、空想癖の父親の下で育ったためか、ルーイズは子供の時から癪癢持ちで、腹を立てていない時は、ふさぎ込み、黙りこくっていた。親に愛された記憶の無い子供が、自分自身を許容し愛することができないで、如何に深刻な存在不安に陥ったかは論を俟たないだろう。

Born of a delicate and overworked mother, and an impulsive, hard, imaginative father, who did not look with favor upon her coming into the world, Louise was from childhood a neurotic, one of the industrialism was to bring in such great numbers into the world.⁷⁾

南北戦争後の困難な時代、北オハイオの農場の苛酷な環境が、いかに少女に不向きだったかは、「血液の中の毒液のようだった」("It was like poison in my blood")という彼女自身の怨念の言葉に窺えよう。ベントリー農場でのルーイズは、決定的に母性的愛情に飢えていた。子供心に、誰かに愛されたい衝動に必死に堪えながら、鬱々とした忍従の日々だった。使用人には遠慮はしなかったが、絶対的権限を持つ冷酷な父親への反抗は不可能だった。しかも、女性の働き手も、ルーイズの母親も過労が祟って命を落とすほどの重労働を強いられていた。とても女性的な情感の入る余地はなく、自然の恵みに触れたり、自然をめでたりする余裕もなかった。そもそも癪癢とは、幼児特有の欲求不満に対する爆発的な反応であり、怒りの表現であるが、癪癢持ちのルーイズが殺伐とした生活に愛情飢餓感と恨み感情を募らせ、心の健全な成長を歪めてしまったことは容易に想像がつく。

父親のジェシイは情よりも意志を優先する冷酷な狂信家だった。他人の心を見通せない、情愛や人間味に欠けた人物だったから、元々、夫婦愛、家族愛、友情などの大切さを認めるタイプではなかった。独断的な押し付け、厳格すぎる要求をして、農場で働く無知なる人々を、かつてないほどこき使い、支配した。目標を設定し、わき目も振らずそれに突進し、農場の生産性を向上させ、収益の増加に腐心した。州内のどの農場にも負けたくないと競争意欲を滾らせ、産業化社会の基本原則でもある成功第一の効率主義を徹底した。得体の判らない不安と渴望感に身体を突き上げられて、いつも心安らぐことがなかったが、一国一城の主として農場経営がある程度成功すると、神に選ばれし者という自信と優越気分が膨らみ、次第にグロテスクな様

相を呈した。元来が、孤独癖の強い、妄想傾向を見せる、求心的な人物だったが、最後は「神の真の下僕」(the true servant of God) という意識が高じ、神と直接対話を願うほどになった。時代を先取る徹底した利潤追求の新しい体質と、神の姿を啓示体験する古き体質を同居させている、いかにも激変・混乱の時代性を象徴する存在だった。

ルーイズは、この絶対支配者の父親に強い反発と嫌悪を感じ、生まれ育ったベントリー農場を逃げ出すように、ワインズバーグの高校に入学するために町に下宿した。下宿先のハーディ家が「自由に向かう大いなる一步」(a great step in the direction of freedom)の足場になると考えた。農場時代の、話し相手もない、閉ざされた、孤独な生活とは違って、華やかさと活気に満ちた町では、自由に心の壁を取り除いて、誰かと気軽に親しくできると期待した。抑圧してきた親愛欲求を一気に解放できると思ったが、それは田舎娘の認識不足で、期待と現実の落差は大きかった。愛情飢餓の子供は、自信が持てない分、自己評価が低く、周囲に取り入って自己評価を託す傾向があるが、ルーイズもその例に洩れなかった。片思いのハーディ家の息子ジョン(彼だけが孤独を救う光だった)に認めてもらうべく優等生のように懸命に勉強をして、ますます依怙地な孤立傾向を強め、出来の悪いハーディ家の二人娘の反発と恨みを買った。中西部の片田舎ではこの頃、若い女性が東部の大学に遊学することはなく、教育の必要性は認識されつつあったが、結局、女性にとってはまだどうでも良いものだった。教養や知性は関係なく、付き合い易い良い娘か、性的に成熟しているか、性的魅力があるか、で勝負が決まった。

親愛欲求の表し方も、恋愛テクニックも知らぬまま、性愛感情に目覚めた田舎娘のルーイズは激しい情熱をジョンにぶつけた。「私は誰かに愛されたいし、また私も誰かを愛したい」("I want someone to love me and I want to love someone.")と、大胆にも自分から心情を綴った恋文を書き送った。抱きしめられ、キスをされることが、「人生の秘密の全て」(the whole secret of life)であると甘く期待し、女として「所有されたい欲求」(desire to be possessed)を抱きはしたけれども、それは必ずしも性欲や肉欲の自覚ではなかった。性に対する不安は依然強かった。

案の定、ジョン・ハーディは誤解をし、愛人として彼女を受け入れた。ルーイズの方から近づき性的な誘惑のモーションをかけたので、自堕落な尻軽女とまでは思わなくとも、少なくとも普通の性欲衝動を持った女という認識だった。妊娠したと勘違いして、急いで結婚した。結婚生活に入ってもなお満たされていないあの渴望のこと(手紙を書かずにおれなかったスキンシップ欲求)をジョンに判ってもらおうと身体を摺り寄らせていっても、ジョンにはその切実さが理解できなかった。ろくに人の話も聞かずに、彼女の唇にキスをし始めて言葉を封じた。性交渉が彼女の渴望を満たすはずだという、勝手な、軽薄な理解に留まっていた。彼女は混乱し始め、自分でも何を望んでいるのか判らなくなり、もうキスされたくないと思い、彼の性的愛撫を女の欲びとして従順に受け容れることを拒絶した。性交の本質を男の支配欲や征服欲の手段だと見なすようになった。

妊娠していないことが判った時、彼女は腹を立て、刺々しい、人を傷つけるような言葉を吐いた。時折、激しい無鉄砲な衝動に駆られて、自分で手綱を取り鞭を当てて、わざと人を轢き殺そうとするかのように全速力で馬車を走らせた。気分変動が激しくなり、物思いに沈んで目に涙を浮かべることもよくあった。その後、息子のデーヴィッド(David)が生まれたとき、育児を放棄し、自分が果してわが子を望んでいるのかも判らない心境に陥った。時折そっと優しく触ったりもしたが、全く寄り付かない日もあった。「この子は男の子だから、いずれは欲しいものを手に入れる。これが女の子だったら、私はどんな事でもしてやるわ」("It is a man-

child and will get what it wants anyway. Had it been a woman child there is nothing in the world I would not have done for it.”) と突き放す言葉を吐いた。親に愛された経験がない娘が母親になった時、わが子を愛せない障害を引きずることはよくある。満たされない愛情飢餓感が怨念にまでなり、男性不信・男性拒否の思いを増幅し、正常な母性愛の発露を妨げたようだ。

ルーイズの厭世的な抑鬱気分が悪化し、何日も自分の部屋に閉じ込もって誰にも会おうとしないことが多くなった。半分、隠遁者のような生活だったので、始終酔っぱらっているとか麻薬中毒にかかっているという悪い噂が飛び交った。周囲の者に敵対感情や攻撃心を露にして、食って掛ったり、悪態をつくことが多くなった。気違いじみた癇癪発作も頻繁になり、一旦怒りだすと、なかなかその興奮が治まらず、子供の前でも平気で包丁を持ち出してジョンを殺すと喚いたり、わざと家に火をつけたこともあった。しかし、いつも常軌を逸する行動をしていた訳ではない。普段はデーヴィッドを近づけなかったが、彼が幼い頃に行方不明になって見つけ出された時、人が違ったように、安らかな優しい顔でわが子をひしひしと抱きしめたことがあった。母性的な気遣いであれこれと身の回りの世話を焼き、低い声で話しかけ、慰めた。心の中には、発現を抑えられていた子を思う親の情愛が潜んでいたようだ。

断片的な情報で正確な全体像は結べないが、自己破滅的な衝動性、見境いのない攻撃性、社会的役割性を拒否する未熟性を考えると、ルーイズの場合は多分に「境界パーソナリティ障害」(borderline personality disorder) の症状であるように思える。⁸⁾ 先ず一番目につくのが、気分変動の激しさで、正常な気分から、抑うつ、焦燥、不安へと激しい変化を見せた。不安定な対人関係パターンは、過度の理想化から幻滅・憎悪へと向かった、夫のジョンに対する態度の豹変ぶりに窺えた。怒り感情が消えずに、絶えず何かに腹を立てている様子で、癇癪を起こすことも頻繁だった。時に、自殺衝動とも言える、馬者での暴走行為を行い人々を驚かせた。根源的には、実存不安にも近い虚無感や空虚感が慢性的に彼女を苦しめていたらしい。未熟な母親のレベルに留まっていたので、母親として子を養育すべき性役割を放棄するという自己同一性障害も見せた。

既述した3人の女性たちとは違って、ルーイズの場合は些か精神病的な要素も入っていて、文学の側からの正確な性格分析の試みは限界があるようだ。しかし、女性の狂気の問題は、極めて今日的なテーマをはらんでいるのも事実であろう。父権社会の下で、男性的規範と戦いながら、伝統的な妻・母としての性同一性を担うことを拒絶しながら、時に深刻な男性不信に苦しみながら、やっと念願の自我解放をして自立に至ったつもりだったのに、根源的な存在不安や癒されぬ空虚感を自己の内部に発見して啞然とする、そんな〈自由な女〉のアイデンティティ危機の問題は、すぐれて現代文学の重要なテーマだからだ。自立までに至っていないルーイズの場合は、自由獲得に向かって離陸できずに、途中で挫折・墜落して、病的な精神状況にまで陥ってしまった訳だ。飛べそうで飛べなかった女性という意味では、古さと新しさが混在していた時代の限界が窺われる。

4人の女性に共通するものは、心と心の真の触れ合いを求める親愛欲求だった。それは、成功や出世に血眼になっている男たちが忘れ去った人間本来の優しさであり、叙情的な心情であった。また、それは、女性的な融和の生命原理であり、純朴で自然な生命感情であった。また、それは、エロスの性的な性愛感情とも同義であり、男性に愛されたいという欲求とも不可分のものだった。

ケイト・スィフトとアリス・ハインドマンの二人の独身者の場合は、女性の自立と尊厳維持

が難しい社会状況の中、孤独な生活を強いられ、自己防衛手段のために、やむを得ず堅固な外的自我の皮膜を張り巡らせて内面世界を守っているつもりが、いつの間にか呼吸困難の仮死状態に陥っていた。彼女たちは窒息死を恐れて皮膜を破り、無意識に、性欲衝動に駆られるように、男性に愛を求めて近づいた。しかし、その親愛欲求の試みは無残にも挫折した。彼女たちは、自らの自我解放を諦め、また孤絶した自我空間へと舞い戻ってしまった。人間本来の情念、エロ的な性愛感情は、父権制社会、それに男性支配の産業化社会にあっては、最初から受容されるのを期待することがそもそも無理だった。

一方、エリザベス・ウィラードとルーイズ・ハーディの二人の場合も、幼くして母親を亡くして愛情飢餓感が深刻だっただけに、親愛欲求が存分に満たされるという淡い夢を抱いて結婚生活に入った。しかし大なる幻滅と絶望を味わうことになった。父権制社会での結婚は、そもそも平等の関係に根ざした親愛感情や尊敬の念を抱くチャンスを奪ってしまう。平等の結婚でない以上、屈従の女性が真に性の歓びや自我解放感を感じるなど有り得なかった。かえって、女性の自己実現を阻み、真実の愛を求める心情を封印し、はては発狂寸前に追いやることになりかねなかった。

効率重視、生産性向上を掲げる産業化社会の到来は避けられないのだけれども、その社会が果して、人間らしさを失わない、情感豊かな、生命感に満ちた社会になるかどうかは、実は女性たちがその鍵を握っているのだ、とアンダソンは言いたいらしい。女性たちを抑圧し、社会的に抹殺することがあってはならない。女性的なものが抑圧されると、人はみんな、出世を願う金銭欲をたぎらす余りに、己を見失い、人間味を失い、心虚しいグロテスクな存在に成り下がってしまう。ネッドしかり、トムしかり、ジェシィしかり、登場している男たちはみんなそうだった。女性の存在が軽視され、女性差別が当たり前であった時代において、この4人の女性たちの悲劇物語は、〈女性的なもの〉や〈女性であること〉の意味を訴え発揚して、後の女権運動に足場を提供する先駆きの意義を持っていた。フェミニズムの旗手であったヴァージニア・ウルフが、同時代のアメリカ作家の中でとりわけシャーウッド・アンダソンを高く評価し称賛しているのも、まさにその意味においてであった。⁹⁾

注

- (1) 使用したテキストは、Penguin Books 1992年版。テキストの語句を文脈中に挿入して引用する場合は、先ず「 」内に日本語訳を入れ、その後の()内に原語を添える。但し、引用頁は省略する。数行に渡って引用する場合は、注にて引用頁を示す。
- (2) この4人の女性を扱った優れた論文の一つに、Sally Adair Rigsbee, 'The Feminine in *Winesburg, Ohio*'がある。彼女たちの虐げられた状況を考えるきっかけになり、大いに知的刺激を受けた。*Winesburg, Ohio* (A Norton Critical Edition, 1996) pp.178-88.
Reprinted from *Studies in American Fiction* 9 (Fall 1981) pp.233-44
- (3) *Winesburg, Ohio*, p.162.
- (4) 親愛欲求と疎遠欲求は、人間本来にある相反する衝動。L・ベラックが、人間の疎外状況において、他人の温かさを求めようとする親愛欲求(肉体接触の欲求)に駆られて近づいても、結局は互いの鋭い刺で傷つけ合う結果になるジレンマを「ヤマアラシのジレンマ」と命名したことは有名。取り上げた4人の女性たちも、他人への〈接近〉と〈回避〉という、現代人の直面するジレンマを先取りして訴えた。
- (5) *Winesburg, Ohio*, p.119.
- (6) *Ibid.*, p.227.

- (7) *Ibid.*, p.87.
- (8) DSM-ⅢのAxis-Ⅱのパーソナリティの一つで、極めて不安定な対人関係、行動、感情、自己イメージを示すパーソナリティ傾向を言い、女性に多いとされている。8項目の診断基準のうち5項目を満たせば本障害であるが、ルーーズの場合は7項目該当。
『増補版精神医学事典』（弘文堂、1985）798頁。
- (9) Virginia Woolf, *The Essays of Virginia Woolf. Volume 4 : 1925 to 1928* (Hogarth, 1994) pp 269-80.